

令和 元年 6 月 30 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16H03490

研究課題名(和文) 隋唐「仏教社会」の多元的構造の解明と東アジア文化論の構築

研究課題名(英文) A Clarification of the Pluralistic Structure of Sui-Tang Buddhist Society and the Building of East Asian Cultural Theory

研究代表者

気賀沢 保規 (kegasawa, yasanori)

明治大学・研究・知財戦略機構・研究推進員(客員研究員)

研究者番号：10100918

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,900,000円

研究成果の概要(和文)：中国史上の頂点の一つに位置づけられる隋唐期は、仏教が深く広く社会に浸透した「仏教社会」と規定できる。それを共通の問題意識に、定期的な研究報告会を重ね認識を共有した(毎年3回)。その上で2度の国際シンポ、浙江大学との国際シンポ「隋唐仏教社会の諸問題」(2017年3月)と「隋唐洛陽学」国際シンポ(2018年3月)、および班員全員の公開「研究成果報告会」(2019年1月)を実施し、各成果は公刊する(一部準備中)。

並行して代表者は唐代房山石経の整理を進め、「諸経題記」「大般若経題記」「巡礼題記」の整理を完了、また唐代墓誌を集約した『新編唐代墓誌所在総合目録』を公刊し、時代理解の手がかりを提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

隋唐時代の特徴を「仏教社会」論を基軸に、多角的に共同研究した試みや具体的成果はまだない。従来「仏教」=宗教の研究は、一部仏教系の専門家に委ねられ、その結果仏教が社会に大きな影響力を持った時代の様相が十分明らかにされてこなかった。そのため仏教(中国仏教)を介した東アジア世界論の構築もまだ十分展開できていない。そうした反省に立って、本研究では仏教と接点を持つ隋唐研究者(歴史、文書、文学、美術、石刻)による学際的共同研究となった。この研究を通じて、新たな隋唐史像、東アジア論、仏教社会史料を提示し、隋唐史の研究に一石を投ずることを目指す。あわせて肥大化する今日中国の本質を考える手がかりを用意する。

研究成果の概要(英文)：The Sui-Tang period, recognized as one of the pinnacles in Chinese history, can be defined as "Buddhist society" as the Buddhism permeated society widely and deeply. On the base of this common understanding, our Research Project held regular meetings to exchange research. Furthermore, we held two international symposiums, one in 2017 titled "Issues of Sui-Tang Buddhist Society" in Zhejiang University, and another in 2018 titled "Sui-Tang Luoyang Studies", then held a conference by the entire membership in 2019 in order to report results through this term. While conducting these activities, the representative collated the Fang-shan Stone Sutras of the Tang Period, as well as complete "The Collection of Records on Many Kinds of Stone Sutra", "The Collection of Records on the Daborejing Stone Sutras", and "The Collection of Record of Pilgrimage Materials on Stone Sutras", and published "the Catalogue of Bibliographic Sources of Stone Inscriptions, Tang Period" to serve in comprehending the period.

研究分野：中国隋唐時代の政治社会文化史

キーワード：隋唐仏教社会 洛陽学 房山石経 敦煌吐魯番文書 石刻史料 唐宋变革 東アジア文化 龍門石窟

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 6世紀末から10世紀初頭まで隋唐王朝期300年は、中国史および同時代の世界の頂点に位置づけられ、古代日本の国家形成にも多大な影響を与えた。そのこともあって戦前以来、日本の学界はこの時代研究に注目し、貴族制論や時代区分・唐宋变革論、均田制・律令制論、藩鎮体制論、東アジア世界論(冊封・羈縻関係論)などの大きな論点を主導的に提示してきた。だが1980年代以降、墓誌など石刻資料や多様な考古系資料の出土、寧波天一閣の「天聖令」(唐令)や杏雨書屋(大阪)の敦煌文書の公開などが続くなかで、個別的具体的史料研究に関心が向かい、隋唐史を大きな視座から捉える姿勢、時代の本質に迫る意欲が後退する事態を招いている。

(2) また情報検索システムの進化も関係して、国書や儀礼の文書、敦煌・吐魯番文書やソグド関係墓誌など既存・新出資料の整理と考察にも力が入れられた。その結果、論文の点数と細部の精密さは確実に増し、学界全体が一見活気にも見た雰囲気を出しているが、歴史研究が担うべき国家論、時代や文化の本質論への関心は薄れ、個別分散化が進み、共通に議論する論点も場所も狭まっている。何よりも危惧されるのは国際的発信力の低下であり、そのことは、近年中国や台湾の歴史学界が提唱する「中国中古論」や「唐宋变革論」に、戦前来先導役を果たしてきた日本学界がまったく反応できていないことに現れる。

(3) その点にも関連して、隋唐の本質を仏教・宗教を軸に考えようとする関心は、本来日本学界の主要なテーマであったが、今や中国や欧米の学界に席を譲ろうとしている。だが仏教は中国史上、この時代に最も広く深く浸透し、人々の思考や行動を規定するまでにいたっているが、そうした関心から仏教の社会的広がりまで考察まで及んでいない。隋唐仏教を多方面から共同研究として取り上げるならば、他にはない独自の隋唐国家論、社会論が提起できるのではないか。また仏教(中国仏教)が東アジアに共通する視角から、まだ十分構築できていない東アジア世界論の構築につながらないか。そのような関心から本研究が進められることとなった。

2. 研究の目的

(1) 中国史上の頂点の一つに位置づけられる隋唐期は、仏教が深く広く社会に浸透した「仏教社会」とも規定できる本質を備えた時代であった。本研究はその「仏教社会」の実相を、共同研究として多面的に分析考察を進め、隋唐国家の本質に迫ることを共通の目的とする。あわせて仏教を介して成立する東アジア世界の文化的な関係性や構造にも目を向け、考察する

(2) 本研究では共同研究として隋唐期の異なる専門分野(歴史、美術、文学、仏教、文書、石刻、日本古代史)をもつ研究者から構成される。そこで全員の共通する接点として「洛陽」という場を設け、その多面的復元も試み、洛陽を基軸とする隋唐国家像を追求する。

(3) 研究代表者はこの研究に関わって、隋唐期の「房山石経」に焦点を当て、雲居寺というと隋唐時代の名刹に残された膨大な石板経典、およそ4千点余り(碎片を含めると5千点)の全集約を試みる。その上でこの刻経事業を支えた地域社会の人々の動向に注目し、唐代仏教社会の一面と権力との関わりに迫る。この房山石経事業の全容を明らかにした研究はまだない。

(4) 研究代表者は従来から唐代研究の一次史料となる「墓誌」の存在に注目し、史料の所在状況の系統的把握に努めてきた。その過去の実績を踏まえ、本研究期間においてさらに集約に努め、所在目録を公刊するとともに、所在状況から新たな隋唐地域社会論を考察する。

(5) 本研究は11名からなる共同研究であるが、その研究上の意義と成果をその範囲に止めるのではなく、対外的にも対内的にも対象を広げ、研究進展の呼び水となる役割を意識する。そのため研究会活動をできるだけ公開するとともに、他の研究会との提携、国際シンポジウムの

開催などを通じ若手研究者の参加・報告に道を開くことにも努める。

3. 研究の方法

(1) 本研究班は代表者を含め 11 名から構成される。これらのメンバーを、本研究の目的を達成するために、5 つの柱(領域)に所属させ(一人 1 ないし 2 領域に所属) 研究にメリハリをつける。すなわち 1) 都市領域(長安・洛陽・揚州)、2) 周辺地域(敦煌・吐魯番) 3) 文化・精神領域(美術・文学・信仰) 4) 国家体制の仏教と東アジア国際関係、5) 唐代墓誌データの集積とデータベース化という 5 つの柱である。

(2) 互いの研究状況の進展を図るために、年に 3 回の班内研究会(ワークショップ)を開催し、それぞれが報告にあたる。原則として 5 月、9 月、12 月に設定。最終年度には 3 年間の研究成果の集約と論文化のために、公開研究成果報告会を実施する。その他、東洋文庫内陸アジア研究会、明治大学東アジア石刻研究会、中国中世史研究会との連携(共催)による成果報告に努めた。

(3) 当科研の成果の国際発信と中堅若手研究者の起用のために、国際シンポジウムを主催(共催)する。当初のその方針にそって、2017 年 3 月に浙江大学と「唐代仏教社会の諸問題」国際シンポジウムを開催し、当科研費側から 5 名が参加し報告した。また 2018 年 3 月には京都大学を会場に、中国 5 名、韓国 3 名の招聘研究者を含む 19 名の報告者で「隋唐洛陽学」国際シンポジウムを主催した。その他、研究代表者は当科研費にもとづく成果を国際発信するために、中国国内やシンガポールの学会に出かけ報告に努めた。

4. 研究成果

(1) 当科研費の最初の成果として『新編唐代墓誌所在総合目録』とその「人名索引」を公刊できた。当目録は中国で発見公表された唐代墓誌の所在目録で、1 万 2 千点余を収載できた。この目録を通じてこの 20 年間の墓誌数の変化(増加)を整理すると、次表のようになる。

版(刊行年)	目録名(刊行年)	収載墓誌点数(=誌+蓋*)	増加数
1(1997)	唐代墓誌所在総合目録	5826 点(5482 点+蓋 344 点)	
2(2004)	新版 唐代墓誌所在総合目録	6828 点(6459 点+蓋 369 点)	1002 点
3(2009)	新版 唐代墓誌所在総合目録(増訂版)	8747 点(8285 点+蓋 462 点)	1919 点
4(2017)	新編 唐代墓誌所在総合目録(2015 年迄)	12523 点(12043 点+蓋 480 点)	3776 点

*蓋:墓誌の誌石が不明で、墓誌蓋のみが存在するもの(対象誌石が不明な蓋も含む)

この 1 万 2 千点の出土地を押さえると、ほぼ半数が洛陽出土で、洛陽の半数が西安(長安)出土となる。ここから洛陽の存在感、洛陽に埋葬する精神的意味が意識されることになった。

(2) 2018 年 3 月 11 日・12 日、隋唐「仏教社会」論をめぐって、孫英剛・浙江大学教授(東亜宗教文化研究中心)とシンポジウムを共催し、充実した研究報告と議論を重ね、隋唐仏教社会論の認識を共有した。報告者は日本側 5 名で中国側 16 名、報告成果は当日の「予稿集」をふまえ、『仏教史研究』2(中国語、新文豊出版、2018 年 8 月)として刊行した。

(3) 当研究の接点のなる隋唐期の洛陽をめぐって、2018 年 3 月 16 日・17 日の両日、国内外の研究者 19 名の報告と 5 名のコメンテーターからなる大型国際シンポ「隋唐洛陽と東アジア」を主催し、洛陽を仏教、社会、都市構造、地理、石刻、政治、道教など多方面から浮き彫りにした。成果は当日「報告論文集」を出し、さらに当日報告できなかった数名を加え、「隋唐洛陽と東アジア」の一書として出版社からの刊行を準備中である。

(4) 3 年間それぞれ担当分野を決めて共同研究を進めてきた。その成果は 2019 年 1 月 12 日に

「科学研究費公開成果報告会 隋唐仏教社会と東アジア」として明治大学で開催し、7名の充実した報告がなされた。当日所用などで数名が報告できなかったが、これをふまえ次年度中に報告論文集が刊行される(出版社も確定)。隋唐仏教社会をめぐる総合的成果となる。

(5) 研究代表者である氣賀澤は、これとは別に年来計画してきた隋唐房山石經の全容把握をほぼ完了できた。それをふまえ「房山雲居寺石經題記資料集稿(修訂版)」「諸經題記」拓本・録文篇、「房山雲居寺石經題記資料集稿(修訂版)」「大般若波羅蜜多經」刻經一覽及び題記・解説篇などをまとめ公表できた。これらをふまえ、「房山雲居寺の総合研究」をまとめる準備に進んでいる。

(6) これに並行して「明治大学寄託中国北朝唐代墓誌石刻史料集」や「明治大学東アジア石刻文物研究所所蔵中国洛陽出土唐代墓誌資料彙編」の整理を手掛け、また『東アジア石刻研究』も7号と8号を刊行できた。その他、前述(1)の『新編唐代墓誌所在総合目録』刊行後の唐代墓誌の集約と整理それにもとづく考察も継続させ、多くの新データの集積がなされている。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計20件)

氣賀澤保規、争坐位文稿の理解のために・争坐位文稿全文詳解、墨(特集顔真卿の争坐位文稿)252、査読無、2018、pp.6-7・24-31、

氣賀澤保規、唐代「巡礼」和五台山信仰、仏教史研究2、2018、pp.167-184

氣賀澤保規、国号「日本」の成立新考、季刊日本主義45、2019、pp.90-96

肥田路美、四川で出土した南北朝時代の仏教石像をめぐって、濱田瑞美編アジア仏教美術論集 東アジア(後漢・三国・南北朝)、2017、pp.247-274

妹尾達彦、唐長安の都市核と進奏院 - 進奏院状(P3547・S1156)をてがかりに -、敦煌・吐魯番文書の世界とその時代、査読無 2017、pp.157-186、2018、pp.111-165

◎妹尾達彦、中原水都:隋唐洛陽城的社会構造与宗教空間、仏教史研究2、2018、

片山章雄、マンネルヘイム吐魯番収集「華嚴經」(M25)諸断片、東海大学紀要(文学部)107、2017、pp.15-32、

片山章雄、唐代吐魯番四神靈芝雲彩画及田制等相關文書的追踪与展望、絲綢之路与新疆出土文献:旅順博物館百年紀念國際學術研討會論文集、2019、pp.446-462

松原朗、杜甫の貴族意識、中国詩文研究会『中国詩文論叢』36、2018、pp.19-41

松原朗、草堂の杜甫 - 成都時代の自画像、中国詩文論叢35、2016、pp.41-65

松浦典弘、唐代の女性と仏教 墓誌の検討を中心に、唐代史研究19、査読無、2016、pp.98-120

松浦典弘、五臺山佛光寺の唐代の經幢、大谷学報97-1、2017、pp.1-18

松浦典弘、唐代的女性與佛教 以墓誌的検討为中心、仏教史研究2、2018、pp.185-196

榎本淳一、中日書目比較考、東洋史研究76-1、査読有、2017、pp.37-78

榎本淳一、『日本国見在書目録』著録書籍の総巻数について、鴨台史学15、pp.1-20

山口正晃、將軍から都督へ - 都督制に對する誤解 -、東洋史研究76-1、査読有、2017 pp.1-36

山口正晃、「中国仏教」的確立与仏名經、仏教史研究2、2018、pp.1-35

梶山智史、北朝の墓誌文化 アジア遊学213(魏晉南北朝史のいま)217、査読無。pp.278 -

288

梶山智史、北朝における墓誌の普及と類型、刻まれた記憶と記録 中国石刻史料データベースの構築・活用と可能性、2019、pp.33-62

櫻井智美、元代の南海廟祭祀、駿台史学162、査読無、2018、pp.27-54

櫻井智美、曹彬不嗜殺 元代における曹彬故事の採用とバヤンの評価、明大アジア史論集23、166-184

〔学会発表〕(計6件)

氣賀澤保規、「房山雲居寺石經」に刻印された唐代仏教社会、東洋文庫講座招待講演、東洋文庫講座招待講演

氣賀澤保規、唐代“巡禮”和五台山信仰 - 從法門寺・房山石經・入唐巡禮記・五台山到會昌滅佛 -、西北大学歴史学院講座(招待講演)(国際学会) 2016

妹尾達彦、唐代信息溝通与都城空間結構 - 從朝集使到進奏院 -、“7-16世紀的信息溝通与国家秩序”第5次工作坊(招待講演)(国際学会) 2018

榎本淳一、日本学界における「書籍交流から見る中日文化交流史研究」の回顧と展望、“一帯一路”與中國故事國際學術研討會(国際学会) 2018、

山口正晃、仏名経類と三階教の関係について、仏教史学会学術大会、2018

小島浩之、国内の図書館が所蔵するアジア資料の概要とリソースシェアリング、第18回図書館総合展フォーラム「外国資料をめぐる課題とその克服」(招待講演) 2016

〔図書〕(計8件)

2016年 松原朗、杜甫全詩訳注(一)(二)(三)(四)、岩波書店、930p、924p、654p、1109p

2017年、氣賀澤保規、新修唐代墓誌所在総合目録、明治大学東アジア石刻文物研究所・汲古書院書院、560p

2017年、氣賀澤保規、雲南の歴史と文化とその風土、勉誠出版、269p+図版8p

2018年、妹尾達彦、グローバル・ヒストリー、中央大学出版部、277p

2018年、氣賀澤保規・孫英剛、佛教史研究2巻 新文豊出版公司、277p

2018年、肥田路美、古代寺院の芸術世界、竹林舎、581p

2018年、松原朗、杜甫と玄宗皇帝の時代、勉誠出版、270p

2019年、肥田路美、アジア仏教美術論集(東アジア 隋・唐)、中央公論美術出版、625p

〔その他〕

ホームページ等

明治大学東アジア石刻文物研究所 <http://www.kisc.meiji.ac.jp/~ishiken/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：松原 朗

ローマ字氏名：(MATSUBARA Akira)

所属研究機関名：専修大学

部局名：文学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：00199837

研究分担者氏名：肥田 路美

ローマ字氏名：(HIDA Romi)

所属研究機関名：早稲田大学

部局名：文学学術院

職名：教授

研究者番号(8桁)：00318718

研究分担者氏名：片山 章雄

ローマ字氏名：(KATAYAMA Akio)

所属研究機関名：東海大学

部局名：文化社会学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：10224453

研究分担者氏名：妹尾 達彦

ローマ字氏名：(SEO Tatsuhiko)

所属研究機関名：中央大学

部局名：文学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：20163074

研究分担者氏名：梶山 智史

ローマ字氏名：(KAJIYAMA Satoshi)

所属研究機関名：明治大学

部局名：研究・知財戦略機構

職名：研究推進員

研究者番号（8桁）：20615679

研究分担者氏名：山口 正晃

ローマ字氏名：(YAMAGUCHI Masateru)

所属研究機関名：大手前大学

部局名：総合文化学部

職名：准教授

研究者番号（8桁）：60747947

研究分担者氏名：榎本 淳一

ローマ字氏名：(ENOMOTO Junichi)

所属研究機関名：大正大学

部局名：文学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：80245646

研究分担者氏名：松浦 典弘

ローマ字氏名：(MATSUURA Norihiro)

所属研究機関名：大谷大学

部局名：文学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：80319813

(2)研究協力者

研究協力者氏名：櫻井 智美

ローマ字氏名：(SAKURAI Satomi)

研究協力者氏名：小島 浩之

ローマ字氏名：(KOJIMA Hiroyuki)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。